

平成 27 年度海外短期研修報告書

オーストラリア夏期英語研修（平成 27 年 8 月 31 日～9 月 25 日）

都市教養学部都市政策コース 2 年 森平 敦士

まずは私がこの研修を振り返って感じたことを書き、次にこの研修の内容を書こうと思います。

私はこの研修に明確な意図や目標を持って参加したわけではありません。ただ漠然と英語が話せるようになりたいとか、オーストラリアで生活してみたいと思っただけでした。夏休み前からこの研修をととても楽しみにしていましたが、出発日が近づくにつれて不安が大きくなっていきました。英語も話せない、親も友達も知り合いもない中でうまくやっていけるだろうか、そんなことばかり考えていました。

実際に最初の数日間はどうもいかないことばかりでした。特に英語。相手が何を言っているのかわからず、自分の伝えたいことも言葉にできません。慣れない英語を使うことは想像以上に頭を使います。語学学校で英語を使い、友達との会話に英語を使い、買い物やバスで英語を使い、家に帰ってからもホストファミリーに英語を使わなければなりません。ベッドに入るところには疲れ果てていました。また、料理も満足のいくものではありませんでした。日本人の私にとって、日本の料理より現地の料理のほうがおいしいということはありえません。利便性も日本とオーストラリアを比べると、オーストラリアは不便な国です。ほとんどのお店は 18 時頃に閉まり、コンビニもあります。電車やバスの本数も少ないです。私はこれらに強いストレスを感じ、日本に帰りたいとさえ思いました。いわゆるカルチャーショックです。このときは本当につらかったです。

しかし、今そのことを思い出すと、懐かしい気分になり、カルチャーショックですら悪くない経験だったと思えます。これらを乗り越えたとき、確かに成長を実感できました。ではどうやって乗り越えたのか。私自身のことでいえば「慣れ」です。料理は 1 週間もたてば違和感なく食べられるようになりました。お店も早く閉まるので、閉まる前に行けばいいだけです。英語は慣れも重要ですが、しっかりと勉強をしなければ話せるようにはなりません。私はこの一か月で英語を話せるようになったわけではありません。聞き取る力は伸びましたが、話すことはまだまだ難しいです。大切なのはとにかく会話することと、地道に文法を勉強することだと痛感しました。

先ほどオーストラリアは不便といいましたが、それを当たり前ととらえると、すぐに慣れ、むしろこれこそがオーストラリアの長所だとわかりました。現地の教会で出会った日本人の方に言われた、オーストラリアは人間が人間らしく生活できる国ということは非常に印象的でした。家族みんながそろって夕食をとったり、地域のコミュニティを大切にすることは、近年の日本では失われつつあり、だからこそ私にとって新鮮で羨ましく感じられました。



さて、この研修で実際に何をしたら書いていきます。まず、私たちはマッコーリー大学付属の ELC (English Learning Centre) という語学学校に通い、そこで英語の勉強をしました。平日は毎日 8 時半から 12 時 45 分まで授業があり、世界中から集まった留学生とともに 1 クラス 20 人弱のクラスで勉強します。日本人は想像していたよりも少なく、中国人やアラブ人、フランス人、タイ人などいろいろな国籍の人がいました。授業内ではグループワークや会話が重視され、2 人や 4 人で話し合いをすることが多く、また、積極的な参加も強く求められました。

授業後はボランティアやバディープログラムなどがありました。ボランティアでは大学内の草むしりや、大学付近の小さな畑を耕したりしました。このボランティアを通じてオーストラリアの環境への考え方を学びました。バディープログラムとはマッコーリー大学に通う生徒と交流するというものです。交流会は一回しか開かれないので、この一回で何とかバディーの人たちと友達になろうとがんばりました。この交流会は大成功し、たくさんの良い友達ができました。彼らとは現在でも SNS を通じて連絡を取り合っています。



この研修での滞在先はホームステイです。首都大生は別々の家にホームステイすることになり、場所もさまざまです。私のホストファミリーはシンガポール系の夫婦でした。また、フランス人と中国人のハウスメイトもいて、私を含めた 5 人で生活していました。彼らと夜遅くまで話すことで、英語も上達し、何より異なる文化や考え方を知ることができました。週末には教会に行き、キリスト教に触れました。この教会では、ミュージシャンが演奏したり、ご飯が配られるなどして、参加者が飽きないような工夫がされていました。ホームステイのおかげで短期の滞在でもより深くオーストラリアを知ることができ、より濃密な時間を過ごせました。

最後に、この研修に参加して本当によかったです。一緒に行った首都大生や、現地の生徒、ホストファミリー、その他さまざまな人と過ごしたこの一ヶ月は私にとって貴重な経験になりました。